

近世移行期における寺内町の形成とその変遷

石 田 誠

目 次

はじめに

第一章 近世移行期の「都市」の志向と寺内町

第二章 貝塚寺内町

第一節 貝塚寺内町の形成

第二節 貝塚寺内町の発展

第三節 ト半斎の領主権拡大とその影響

第三章 富田林寺内町

第一節 富田林寺内町の成立

第二節 富田林寺内町の変遷過程

おわりに

はじめに

本論文の趣旨は、戦国期に形成された寺内町の成立からその発展過程を分析し、さらに江戸初期における寺内町の様相までの変遷をみることを通して、近世移行期の寺内町のありようを探ることである。近世社会の始まりは、統一政権の成立によって始まるわけであるが、この統一政権の形成と発展のなかで、中世社会に大きな影響

を与えた宗教教団、特に本願寺教団の様相と、もう一つ中世社会に大きく発展した、寺内町など都市の様相の変化について分析することとで、中世と近世のありようの違いはどの点にあるかを明らかにしていきたい。

かつて宗教史の分野では近世仏教墮落論が展開され、近世仏教は幕藩体制下において檀家制度と本末制度の役割を受け持つにいたって国家構造に組み込まれたとされてきた。しかし近年、近世仏教が国家ではなく、より民衆に近い方向性を持つていたとして、仏教墮落論に対して再評価がなされている。とくに真宗は中世以来民衆に近い立場であり、民衆を基盤としていたことから仏教墮落論とは異なった新たな近世仏教論を展開してきたといえる。では民衆と近世仏教を結びつけたものはいったい何であったのであろうか。そのときのキーとなる言葉が「自律性」であった。

中世社会を通して民衆闘争を経た民衆には、一定の「自律性」が形成されてきたわけで、統一政権もこの民衆の「自律性」を無視していくわけにはいかなかったということである。そのような中で、本願寺教団も幕藩制国家形成過程との対応において、自律的に教団形成の道を選択したとみなされている。では民衆の「自律性」と教団の「自律性」、さらには幕藩体制（もしくは統一政権）における「自律性」のありようとはどのようなものであり、どのような関係であったといえるのであろうか。次章以下でみていきたい。

第一章 近世移行期の「都市」の志向と寺内町

近年、都市論について考察する視点が確立されてきたわけであるが、特に都市における「共同体」についての志向がどのようなものであったのかがテーマとなっている。都市共同体にとっての志向とは、中世的な複雑で重層的な社会構造のなかで、中世的な都市構造の矛盾を解消し、都市の「平和」を実現することであった。

統一政権の志向は、今までの戦国大名などが克服できなかった社会構造を一元化していくことであった。この志向は都市共同体の志向とすることでもあった。さらに統一政権はこの都市共同体の力を無視することなしに、全国の城下町の形成や、刀狩や検地といった政策の根幹にある農村掌握も実現できなかったとみなされているわけである。つまり中世社会では農村と都市を分離することは不可能であったが、ここにそれが可能になった。つまり、「都市」が社会を変化させたということである。

では寺内町において、そのような変化があったのであろうか。この章では、近江山田の寺内町と越中古府の寺内町からその手がかりを探ってみよう。

第二章 貝塚寺内町

この章では、和泉国貝塚寺内町の形成から発展の歴史を振り返り、「寺内町」のありようから先の所までにおいての問題を考察したい。

近世移行期における寺内町の形成とその変遷

貝塚寺内町が注目される一つには、中世に成立した寺内町は、ほぼ消滅するか、在郷町という形に変化して近世にいたるわけであるが、貝塚は近世を通して「寺内町」とみなされ続けたからであった。

貝塚寺内町の草創期においてその中心となった人物としては、貝塚における門徒代表であった佐郷屋藤右衛門という商人と、根来寺から貝塚の真宗道場に迎えられたト半斎了珍という人物がいたわけである。しかし石山戦争を経て、さらに本願寺の本山が貝塚に移り、その後本山が天満に移るとト半斎了珍の力が強くなっていく。その背景には、ト半が秀吉・家康といった権力者との関係を深め、さらに後ろ盾として東本願寺との関係を強めたからであった。江戸時代に移り二代目ト半斎了閑が後を継ぐと、その専制性はさらに強くなっていった。そして慶長十五（一六一五）年、ついに貝塚の住人は幕府に対してト半の圧政を訴え、訴訟を起こした。結果としては住人の敗訴におわり、ここにト半家による貝塚支配が確立したわけである。

この一連の事件の背景には寺内町としてのありようの変化がみとれる。この住人の訴えは十五条にも及んでいるわけであるが、その多くはト半家による経済的特権の掌握に対してのものであった。これはつまり、今まで住人が所有していた経済的特権がト半によって取り上げられたわけである。寺内町であるからには経済的特権と領主権の二つを兼ね備えておかねばならないが、私はその経済的役割を住人が担っていたと考えている。そしてト半は、権力者と

の交渉を行う政治的役割を担っていたのではないかと見ている。しかし近世において卜半のもとにその権利が奪われ、寺内町の一元化が行われていったのである。

第三章 富田林寺内町

河内国富田林寺内町は「大坂並」体制の中心であったため注目されている。「大坂並」とは、石山本願寺に認められた特権と同じ内容の特権を認められたということである。このような形で本願寺法王国体制が広がっていくと考えられてきたわけである。ここでも寺内町の成立からその変遷を追っていきたいと思う。富田林は興正寺の寺内町であった。その興正寺と八人衆と呼ばれた年寄層を中心に寺内町が形成されていた。富田林に変化が見られたのは石山戦争のときであった。このとき富田林は信長側という形の中立の立場をとったのである。

しかしその後、秀吉政権期以降は在郷町となり、寺内特権も剝奪されたわけである。しかし一部住人は今まで興正寺がもっていた寺内での徴税権を、幕府の下請機関として年寄層を中心にした一部住人がその役割を担って行った。そして貝塚での例と同じように対立が起きたのであった。私は寺内町におけるこのような対立の原因としては、中世において寺内町では経済的特権と領主的特権が認められていたわけであるが、今までの研究では寺院か惣的結合のどちらかが主導権を持っていたとなされてきたが、私は寺院には寺院の役

割、つまり権力者との交渉などの政治的役割を担い、住人は寺院が獲得した特権をもとに経済的役割を担っていたと考えている。そのバランスが崩れ、一元的な体制が確立するわけで、このような体制に反発したものであったと見ている。

おわりに

貝塚・富田林の分析の結果、寺内町においても一元化の流れがあったことがわかる。統一政権の一元化の志向は、本願寺教団にも、都市においてもみられるものであった。そしてその一元化のキーとなったのが「自律性」の問題であった。近世においては統一政権の志向した「自律性」以外のものは認められなかったといえる。しかしここまで見てきて分かったように、寺内町における「自律性」は一元化の流れに対して反発するものであった。明らかに統一政権やそのもとに「自律性」を維持しえた本願寺教団や都市共同体の志向とは異なっていたわけである。こういった意味から寺内町に見られた中世の「自律性」は、近世社会においては存在していないと見たわけである。

戦国末期は「自律性」の再編成が行われる時期であった。そのときのポイントとは諸教一致の流れであった。その中心となったのが天皇權威であった。本願寺が勅願寺となることにこだわった理由もここにあるといえる。しかし先にも述べたが、このような「自律性」は統一政権や教団・都市共同体の論理となり、近世社会における論

理になったとしても、中世における論理とは異なったものであったといえる。そういった意味で寺内町も中世と近世ではまったく異なった町となったというわけである。

最後に今後の課題に触れておきたいが、重要なことは「自律性」のなかにどのような精神が含まれているかであると思う。この点を解明できれば、仏教教団の様相などもより具体的になっていくであろう。今回は社会的背景からの考察が多かったが、今後はその辺りから寺内町についても考察していきたいと考えている

行基の基礎的研究

——律令国家と呪術性をめぐって——

田 中 丈 博

目 次

はじめに

第一章 先行研究の検討

第二章 行基の活動の検討

第一節 養老年間の活動

第二節 神亀年間及び天平年間の活動

第三節 大仏造立をめぐる行基の活動

むすびにかえて

これまで多くの研究が行われてきた行基について、行基の呪術性、さらには律令国家との関わりについて考察した。

行基については、養老元年の国家による行基への禁圧と、その後の大仏造営への行基の参加及び大僧正就任をめぐる変化があったのか否かが問われてきた。

行基の変化については、律令国家とのかかわりから、大仏造営以降であるのか、それとも大仏造営以前の救済・土木事業の増えた神亀以降であるのかが問題とされてきた。

一方、行基の呪術性については、行基の呪術性を強く認める研究